



第18回：第3章-その3-

私にとっての“対人援助”をレポートする「映画」



著：長谷川福子

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

2023年5月。渡辺先生から、「対人援助をレポートする一本」というテーマで対人援助学マガジンに投稿しないかと、声をかけていただいた。2021年度の対人援助学会で話した内容である。こんな私に声をかけていただけることに喜びを感じ、意気揚々と「ぜひ！やらせてください」と返事をした。もちろん、締め切りスケジュールを確認した！…が、この原稿を執筆しているのは、例によって締め切り4日前である…。

さて、振り返って考えると、私の対人援助に関わる行動をレポートする「映画」は何だったのだろうか。そもそも対人援助とは何なのだろうか。それと映画の関係性を、どう見出すことができるのか。人並みに色々と映画を鑑賞してきたつもりだけど、ちゃんと覚えているのか。と、執筆早々、様々に頭を悩ませている。

以下、それぞれの悩みについてどのように考えたのかを簡単にまとめながら、私の対人援助に関わる行動をレポートする映画について、ご紹介したい。

対人援助とは？

まず、「対人援助」とは何かについて、頭を悩ませた。可能なかぎり行動単位で考えたいので、ひとまず「対人援助」とは、対人援助に関わる行動としよう。ここで、「対人援助」的機能を果たす行動とはどのような随伴性で生じる行動なのか、その定義も必要となるだろう。本稿では、対人援助に関わる行動として、カウンセラーや相談員としての職に携わってきた経験から、それらの仕事に関わっている行動としよう。さらに、ワークショップ当時の私は、3人の未就学児(6歳、3歳、2歳)の母でもあった。子どもたちを育児する行動も、機能的には対人援助の行動と考えてよいだろうと考える。

ほんの少しだけ具体的な行動を考えると、悩みごとや困っていることを抱えている人の

お話を聞き、その主訴を明確にさせる。可能ならば、悩みごとなどを改善するための対処法をとともに考えたり、行政や医療機関などの適切な支援機関を紹介したりする。もちろん、その方との雑談も楽しみ、場面に応じて自己開示も時々する。また、幼児や児童と関わる仕事では、子どもたちと一緒に様々な活動を楽しみながら、その子の行動を観察し、声掛けや関わり方を工夫していく。子育てに関しては、子どもたちが健康的に生きられるよう、生活に関わる全てをサポートする。

これらの行動は、もちろん仕事であればルール支配行動とも捉えられるが、その仕事を辞めるも続けるも自分の匙加減で決められる。このように考えると、やはり、仕事を続ける、すなわち仕事に関わる全ての行動を維持するのは、自然な強化随伴性だったのだろう。また、育児も同様である。

これらの行動が自然な強化随伴性にさらされることで維持されてきたが、時にはその強化随伴性に対する感受性を無くしてしまう時もある。例えば、疲弊していないときは子どもたちの同時多発的に起こる要求のハリケーンも、仕事で対応しているケースが順調に進まないときも、それらがチャレンジングなので「やってやろう！」と私の行動頻度は増加する。また時には新たな行動が出現したりもする（リサージェンス?）。しかし、疲労困憊のときは、子どもたちの要求を嫌悪的に感じたり、うまくいかない仕事のケースについて悲しみを感じ、回避行動をとろうとしてしまう。今、これをやっていて良いのだろうか。私がさらされるべき随伴性は育児だけの随伴性なのか、仕事だけの随伴性なのか。少しでも強化率の高い方だけに反応を振ろうと随伴性選択に迷い、過大対応的行動をとろうとしてしまう。複数の強化随伴性のある社会環境では、過大対応的選択行動は非常に排他的となるため望ましくないだろう。ここで、強化随伴性に対する感受性を回復させることがとても重要となってくる。それは疲労回復や、他者がさらされる随伴性を観察することでもたらされるだろう。ここで、そのツールとして、「映画」が出てくるのである。

どんな映画を見てきたのか？

「映画」といっても、私がこれまでどんな映画を見てきたのかをまず簡単に思い起こしてみよう。私は小学生の頃から、スターウォーズやスタートレックなど、SF系の作品がとても好きだった。単純に、自分が置かれた環境と全く異なる環境を覗き見ることで自分の好奇心が満たされたし、その異質な環境下で繰り広げられる、ロボットやAI、異星人や生物たちが描き出す人間ドラマが非常に興味深かった（人間じゃないのに人間が描き出すことで人間らしくなる人間以外の生物の話…）。

それと同時に、中学生以降は恋愛ドラマの映画も好きだったのは言わずもがな。自分が経験できない素敵なラブストーリーを見て、気持ちを充足させていた。大人になってからも何度も鑑賞するのは「君に読む物語」である。存在するのかもしれないのか見当もつかないが、「愛」や「絆」が私たちの行動を突き動かし、人との関係を継続させていく。夢見る乙女（も

う乙女な年齢ではないが自称させていただきたい)と言われても良い。私はこのストーリーに美しさを感じている。

大学生になってからは、社会問題を取り扱った映画も色々と鑑賞した。「第9地区」や「存在のない子どもたち」,「パラサイト 半地下の家族」など。どの作品も、社会問題を考えずに見るのももちろん興味深い。しかし、その作品に練りこまれた社会問題を考えながら鑑賞することで、私たちが解決すべき様々な問題を、映像や音楽、音声、行間、沈黙でこのように多くの人に印象深く訴えかけることができるのか、と驚嘆する。同時に、その社会問題を深く知らなかった私に対して、何かアクションを起こさなければという気持ちさえ生じさせる。

学生の時気になる映画があれば一人で映画館へ行き、映画を鑑賞したり、映画のジャンルを縛って夜中に「〇〇ナイト」と称して友人を交えて映画を鑑賞した。結婚後は、どれほど仕事や、やるべき事が溜まっていて忙しくても、「金曜夜はDVDを見ナイト」と称して様々なジャンルの映画を夫とともに毎週鑑賞してきた。それぞれのエピソードも何か折があれば話したいが、ひとまずこれまで鑑賞してきた映画の中から私の“対人援助”をレポートする映画は何なのか考える。

私の“対人援助”をレポートする映画は何だったのか？

そのような映画として、その時その時で様々な映画を挙げるができるだろう。ワークショップの話をいただいたときは、「クレヨンしんちゃん 大人帝国の逆襲」が、まさにそれであった。この映画のストーリーは簡単に述べると以下の通りである。

春日部に誕生したテーマパーク“20世紀博”に、主人公のしんのすけや友人たちの親が、子どもたちそっちのけで熱中してしてしまう。そのテーマパークでは、70年代の文化を再体験することができ、大人たちは自分が子どもだったときを思い出し抜け出せなくなってしまふ。しんのすけと友人は春日部防衛隊を名乗り、大人たちを取り戻すべく立ち向かう…という話である。この映画を初めて見たのは、実は私が中学1年生の時である。ストーリーの中で繰り広げられるギャグ要素に大いに笑わせてもらい、お気に入りの作品であった。しかし、大人になり、家庭、子育て、仕事と忙しさにかまけているうちに、この映画のことをすっかり忘れていた。そんなある日、私の姉が「しんちゃんの映画、何本かDVDに入れてるよ。見る？」と声をかけてきた。姉は、私の子どもより2つ上の子どもがいて、その子がすっかり「クレヨンしんちゃん」のファンだったのである。DVDを借りて久しぶりに鑑賞。驚いた。私は、この映画から学ぶことが沢山あったのだ。

一つは、懐古主義への批判である。映画の中で、大人たちは悪役2人の「昔の方が良かった。だから昔に戻りたい。過去に戻るのではなく、現在に過去を蘇らせよう」という思惑に賛同し、現在に70年代の生活を復活させようとする計画に乗ってしまう（実際はそのように洗脳しているシーンがある）。しかし、やはりこの計画はうまくいかないのである。現在

ではなく過去に意識を巡らすことで問題が生じるシーンが描かれる。私たちの生活を振り返ると、私も「以前はこうだった。昔の方が良かった」とつい思いがちであった。そして、自分の子どもたちには、自分が経験したことを経験させられない…と深く考えることもあった。これらのことを考えるとき、私の視点は過去にあり、現在を見つめていないのである。現在を見ずして、何を杞憂するのか。過去ばかりに思いを馳せていては、発展は望めないのである。ともすると懐古主義的思考になってしまう自分を気づかせてくれたのである。

二つ目に懐古主義への批判と繋がる、未来への希望についてである。懐古主義的になるのは未来に希望が持てないからとこの映画では描かれている。しかし、現実、時間は前向きに進んでいるのである（厳密には、前向きに進んでいるように体感しているだけかもしれないが。この話はまた今度…。未来に希望が持てなくとも、前に進んで行こう、その中で今後の発展が見込まれるのだということも描かれており、ハッとさせられた。子どもを出産してから、不安や悲しさ、焦りなどのネガティブな感情に苛まれることが多くなり、子どもの将来や自身の未来を案じるが多くなっていった私は、このメッセージに感銘を受けたのである。そうだ、アクションを起こす前に色々と案じて結局アクションを起こさないよりも、前に進んでいこう、アクションを起こしていこうと奮起するのである。

三つ目に、絆の重要さである。上では「存在するかしないか見当がつかない」と述べたが、この映画を見ていると家族の絆を感じる。しんちゃんとその父母、妹、飼犬は一致団結して悪者に立ち向かう。その中で、悪者に対して「俺の人生はつまらなくなかない！家族がいる幸せをあんたたちにもわけてあげたいくらいだぜ！」と主人公しんちゃんの父であるひろしは言う。この一言は私の胸をグッと掴んだ。自分の親も果たしてこのように感じて生きてきたのだろうか、また私はこんな風を感じるができるのだろうかと考えてしまった。自分の親の日々の言動を見ていると、このように感じていそうである。一方で私はどうなのだろう。胸を張って、「家族がいる幸せを分けたい！」と言えるだろうか…たぶん言えそう。この感情があることで、家族内で互恵的な行動が維持されるのかもしれない。私は、この感情の存在を意識していなかったが、この感情を意識することで、自身の“対人援助”もリポートされるような気がしたのである。

私の“対人援助”をリポートする映画として、「誰も知らない」という映画も簡単に紹介したい。この映画のストーリーは以下の通りである。この映画は1988年の巣鴨子ども置き去り事件を題材とした、是枝裕和監督の映画。都内の2DKアパートに住む母と4人の子ども。母に恋人ができてしまい子どもたちはネグレクトされてしまう。長男が下の子たちの世話をすることで、何とか生活をやりくりしようとするが、不条理な毎日に長男は疲弊してしまう。まだ鑑賞していない方のためにストーリーの詳細は割愛するが、題材となった事件を知らなくとも、多くのことを考えさせる映画である。まさに「誰も知らない」子どもたちの話であるが、この話から、社会の網目をすり抜ける存在がいることを自覚させられる。それは、この社会の中の誰が悪いのかとジャッジメントするための気づきではなく、まさに存在を示すための気づきを与えるキッカケであると感ずる。この時点でも非常に心苦しくなり、

辛くなる。自身がいかに恵まれていたのかを知らされ、「誰も知らない」子どもたちに気づくことなく暮らしてきたことに言いようのない無力感や申し訳なさを感じる。このような感情を抱かせ、社会問題について知らせる機能がこの映画にはあるだろう。さらに「誰も知らない」子どもたちにどうやって気づき、どのように支援の手に繋げていくのかという問題意識も醸成させる。この映画を思い出すことで、社会にはまだ見落とされている子どもたちがいるかもしれないと振り返ることができ、その子たちのためにも“対人援助”を続けていこうと、リブートされるのである。

最後に、2015年、持続可能でよりよい世界を目指し、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓った「持続可能な開発目標:SDGs」が国連サミットで採択された。誰一人取り残さないためにも、私も、私が可能な範囲で“対人援助”に関わっていきたいと強く願う。そのためにも、私の“対人援助”をリブートする映画や書籍を大切にしていきたい。最後まで本稿をお読みいただき、ありがとうございました。

—つづく—